

# ラサール、ビスマルクの第一回・第二回会談について

田 中 友 次 郎

## Über die erste und zweite Unterhaltung zwischen Lassalle und Bismarck

TOMOJIRO TANAKA

このテーマについて主に参照した文献は、ビスマルクに対する鋭い批判的研究の碩学として知られる Erich Eyck (1878~1964) の „Bismarck“ (3巻, 1941~44) の第一巻 (以下 Eyck と略す), およびラサール研究史上の四大家 (E. Bernstein, G. Mayer, F. Mehring, H. Hermann) の一人, Franz Mehring (1846~1919) の „Geschichte der deutschen Sozialdemokratie“ (2巻, 1960, 以下 Mehring と略す), さらに, 四大家の著述に新たな史料を加えて総合集約した Shlomo Na'aman (シュロモ・ナアマン) の大著 „Lassalle“ (1970, 以下 Na'aman と略す) の3つである。Na'aman については一般に知られていないが, ドイツ労働運動史の研究で名高い九大名誉教授小林栄三郎先生の教示に基づき, Verlag für Literatur und Zeitgeschehen 発行 „Archiv für Sozialgeschichte (Jahrbuch der Friedrich-Ebert-Stiftung)“ Bd. II. (1962) S. 370 を調べた処によると, 1912年生まれ, Jerusalem 大学の B. A. および M. A. で, 1962年現在 Tel Aviv 大学における中世史および近代史の Dozent である。なお, Na'aman には, 上述の大著のほかに1968年, ラサールにおけるドイツ精神とユダヤ精神との結びつきに関する研究書 „Ferdinand Lassalle-Deutscher und Jude“ その他の著述があり, 年令の関係から今は多分 Professor ではないかと思われる。要するに Na'aman は現代におけるラサール研究の第一人者であると推察される。

さて便宜上まずラサール (Ferdinand Lassalle. 1825. 4. 11~64. 8. 31. 1863年5月23日全ドイツ労働者協会会長) とビスマルク (Otto von Bismarck. 1815. 4.1~98. 7.30. 1862年9月23日プロイセン首相) との関係を簡単に一瞥するため, 当時ビスマルクの側近に在った R. v. Keudell 参事官著 „Fürst und Fürstin“ (1901). S. 175ff. の要約をここに紹介する。この要約は, ラサール死後2カ月余り経った1864年11月コイデルが自分とビスマルクとの談話に関連して述べたものの要約で, 旧版の „Bismarck Die Gesammelten Werke“ 第7巻 Nummer 79 に載っている。但しこの要約はビスマルク体制側のスポークスマンの立場からの叙述で,

しかも極めて皮相的な観察であることは、言うまでもない。

「、、、。少し後に大臣(注. ビスマルク)に対し、今夏決闘で死んだラサールが **Bucher** (注. 1817~92. 著述家、民主主義的政治家、転向して1864年から正式にプロイセン外務省に勤めた。) を彼の遺言の執行人に指名していた、それゆえ二人の 関係は親しかったにちがいがなく、ブーハーは察するに社会民主党员であるということが報告された。ブーハーの家族と旧縁のあった私は彼に対し、この有名なアジテーターとの彼の以前の関係をできるだけ十分に説明するよう勧めた。ブーハーはラサールが 曾て彼に書いたすべての手紙を提出した。その結果、ラサールはブーハーを好きであり、しばしば食事に招待した、しかしブーハーを彼の社会主義的見解に転向させようとのラサールの再三の試みは失敗したままであったという結論が出た。私からそれらの手紙の提出を受けた大臣は、それらの手紙の返還に際し私に、ラサールとの自分の交際は自分にさえ非常に多くの楽しみを与えたので、ラサールとの交際ゆえにブーハーをなんら非難すべきではないと言った。

すでに1863年ビスマルクは折にふれて、ラサールがたびたび自分を訪ね、非常に愉快に会談したということについて語った。ビスマルクによると、——ラサールはなるほど熱狂者で彼の世界観は一種のユートピアであるが、彼は人が喜んで彼の言葉を傾聴するほどに才知ゆたかに話す。彼は曾て耳を傾けたすべての雄弁家のうちの最上の人である。彼のスポーツは幾千人の労働者たちの前で演説しその拍手に酔うことである。政治的には進歩党に対する彼の抗争が好ましい。それゆえ適当な時点で関与すると留保の下で彼のアジテーションをしばらくの間放任してもさし支えないのだ。——

ドイツ・デンマーク戦争の勃発(注. 1864年1月末)から2, 3週間の後に大臣は、私にラサールからの手紙を渡した。ラサールはこの手紙と一緒にちょうど出版されたばかりの2冊の著書を送り届けた。小さい本には „Herr Bastiat=Schulze von Delitzsch, der ökonomische Julian oder : Kapital und Arbeit“ (注. Bastiat は1801~50, フランスの国民経済学者)の表題が付けられていた。手紙には次のように述べられていた。『大臣がこの木材に 核心的楔を刻んで最大限に利用されるよう望みます。この木材は閣議においても進歩党に対抗するに当たっても、、、非常に有用であります。国王がこの本の2, 3章を読まれたら、いかなる王国が依然として未来を持っているかを認識し、国王の友人はいつこに、真の敵はいつこに居るかを明らかに洞察されるであります。』大臣は私に一風変わったメモを渡し、自分は非常に忙がしいので、口頭または文書をもって自分の名前で、有難く拝受した旨を伝えるよう私に命じた。あの年代(1863~65)には憲法闘争のいわば治療の処方を提供するために大臣と話したいと願う人々の数が多かった。そして大臣はこれらの人々の願いを聴き届けるようにとの命令をきちんと私に伝えた。そのため私は成果のない事務をひどく負わされ、とてつもなく過度に無価値な書簡の記述者と個人的に知り合いになろうとの願いをなんら持たなかった。たまたま **Wagner** (注. 1815~89. 保守的政治家、「十字新聞」編集者) はラサールから次の言葉を聞いた。『私、ビスマルクそしてあなたがプロイセンにおける3人の一番賢明な人間です。』2,

3日後大臣は笑いながら次のように言及した。——ラサールは手紙で、彼がその書物に向けた大きな労苦はただ一参事官のそっけない一片の手紙によって報いられていると苦情を述べ、彼の著作に対する具体的な同意を求め、大臣とやがて語り合わねばならないと訴えた。——この語調はビスマルクになんらの反響をひき起さなかった。私の知る限りでは、大臣は1864年2月以後もはやこの才気煥発の雄弁家に会ったことはなかった。我々が9月初めバーデンで得たラサール死去の知らせは、大臣になんらの感銘を与えなかったように思われる。ラサールは、彼の病的に過度に緊張した自負心の爆発によってビスマルクの好意を取り逃がした。」

以上1901年におけるコイデル参事官の回想記は、これから述べるラサール、ビスマルクの第一回・第二回会談について数々の示唆を与えている。このことは筆者の叙述のなかで自ずから判明して来るであろう。なお本稿では紙面の都合で、1863年9月27日におけるラサールのビスマルクに対するいわゆる「ゾーリンゲン電報」以降の二人の交渉については触れることができず、後の機会に譲ることとし、これから両者の第一回・第二回会談の目的・内容および結果を主軸として論述を進めて行きたい。

さて1863年5月11日、まさしくプロイセン下院で兵役義務に関する法案について議長 Sybel (1817~95. 大歴史家、1866年普墺戦争勃発までは反ビスマルク的であった。)と陸相 Roon が激論を行なったその日に、およそ6カ年来ベルリン在住中のラサールは、ビスマルクにより「見えすいた口実の下に」(Eyck. S. 495) 始めて招かれた。この時ラサールは全ドイツ労働者協会 (Allgemeiner Deutscher Arbeiterverein. 略して ADAAV) の会長就任に先立つこと12日、38才、ビスマルクは首相となって8カ月足らず、48才であった。ビスマルクの当日付ラサールあて招請書簡の内容は次のごとくである。「拝啓、労働者階級の状態についての懸案となっている協議を顧慮して(注。招請の目的は実は政治的なのに、社会的であるがごとくに装っている。)この問題に従っていられる自主独立的な方々の鑑定家としての意見発表を聞くことが目的であるということを恭んでお知らせいたします。敬具 v. Bismarck」(1872年新版 Bismarck Otto von, Gesammelte Werke, Bd. 14 II. Nr. 994)。ラサールは即日ビスマルクと会談したのである。

この第一回会談の仲介役を為した者は、既述のコイデル参事官の回想録に出ている Lothar Bucher である (Brockhaus Enzyklopädie. Bd. 3. S. 390) と想定される。この想定の本拠は次の2つである。①「ブーハーはラサールと同じく孤立していた政策家であったが、ラサールより早くビスマルクの方へ転向していたと言われている男であり、とにかくビスマルクの許で勤務していた。」(Na'aman. S. 439)、しかるに「ラサールは生活がある点で関係していたので、ブーハーを獲ようと努力した。ラサールは今や知識人や専門家の自由主義に対抗する衝撃的な政治論を必要とした。というのは、ブーハーは『民主主義』は殊に自由主義との対立を意味していると解釈する男だったからである。ラサールは未だ彼が経験したことがないほど強くブーハーに言い寄った。」(Na'aman. S. 439)。②第一回会談後数カ月「ブーハーはビスマルクに対し、ベルリン社会におけるラサールの悪評ゆえに個人的交際を差し控えるよう話した。」

(ibid. S. 448) ことがある。

それはとにかく、1863年5月11日の第一回会談、さらに同年6月初め（日付けを証明する文書が残っていない。）の第二回会談は、ラサール、ビスマルクにとって、それぞれどんな目的のためであったか。その理由ないし狙いを考察する。そのためには先ず当時のプロイセン下院の勢力分野を概観する必要がある。„Mehring“によると、1859年の選挙で、下院議員総数352名のうち政府与党が263名であった。（Cf. S. 640）。しかるに、1861年6月9日綱領を発表して結成された新党ドイツ進歩党（*Deutsche Fortschrittspartei*）は、東プロイセン代議士の一部と旧48年派との統一組織で、ブルジョワ・リベリズムを奉じ、同年の選挙で一挙に161議席を獲得、ために政府与党は95議席に激減した。（ibid. S. 646）。このことは正に下院における革命的な議席数の変動である。さらに1862年5月の選挙で進歩党は完勝して約250議席という圧倒的多数を占めた。（ibid. S. 647）。

さて、この進歩党の首領であり同党の社会政策的権威は、経済学者 *Schulze-Delitzsch* (1808～83) で、彼は1859年自助に基づく協同組合を設立し、その指導に当たっていた。一方ラサールは1862年4月12日有名な „*Arbeiterprogramm*“ を労働者協会で講演し、そのなかで、労働者階級の民主主義的意義について語り、„*Idee des Arbeiterstandes*“ から「直接普通選挙権」を要求したが、この要求は進歩党のブルジョワ的性格とまさに対立するものであった。思うに1849年以來の反革命的反動時代にドイツ・ブルジョワジーの執り続けて来た「静観主義（*Quietismus*）」は、プロイセンのブルジョワ自由主義的民主主義の精神的根本態度であった。——というのは、時代がかれらに有利に動いていたからである。しかるにラサールの根本態度は、時代がかれらにもまた有利に動いているにも拘わらず焦っていた。というのは、実になお獲得すべき非常に多くのものが存しており、ブルジョワ的自由派の状態は、おそらく封建的絶対主義的状态以上にかれをむかつかせていたからであった。」（*Na'aman*. S. 432）。

1962年9月23日付首相となった封建的な地主貴族いわゆる *Junker* のチャンピオンたるビスマルクが、ラサールと関係を持つ契機がすでに上述の点に暗示されている。ラサールによると——労働階級は支配階級となるべく運命づけられており、労働階級の *Prinzip* を全時代の *Prinzip* に高めるべき天職を与えられている。„*Arbeiterprogramm*“ によると、「諸君は現代教会建設の基礎となるべき岩石である。」このことから特殊の労働党の創設が間近に迫っていたのである。この労働党は、その政策が従来何であったにしても、あらゆる場合にブルジョワ自由主義的な進歩党と、選挙人中のこれまでの進歩党の信奉者を奪い合わねばならなかった。これを果たすためラサールは翌1863年3月1日ドイツ労働運動史上の画期的文書すなわち「公開答書」（*Offenes Antwortschreiben an das Zentralkomitee zur Berufung eines allgemeinen deutschen Arbeiterkongresses zu Leipzig—Lassalles soziales Arbeiterprogramm*）を発表した。この答書はきわめて不釣合いな意味をもった2つの綱領項目をふくんでいた。すなわちこの答書には、普通選挙権の要求と労働者生産組合に対する国家補助の要求とが並列されていた。この組合は、既述のブルジョワ自由主義的進歩党領袖 *Schulze-Delitzsch*

の組合と形式上同じ方向をめざしているため、殊に政治的色彩をおびていた。

ビスマルクがラサールの運動にいかなる興味をもって対処したかについては、労働問題で効果を発揮すべき方策をとよう命ずるための1863年4月12日付商務大臣 **Itzenplitz** 伯あて訓令 (**Bismarck Ges. W. Bd. 4. S. 94 f.**) がこれを示している。この訓令はある保守的組合の請願書に言及しているにも拘わらず、ビスマルクが結びの処で「この件に対する温い思いやり」(**meine warme Teilnahme für diese Angelegenheit**) を述べているのみならず、政府がこの件を熱心に調査研究すべき政治的諸理由を強調している点から観て、ビスマルクがラサールのアジテーションの政治的影響を眼中に置いているということが明らかに推察される。ラサールの普通選挙権要求は、ビスマルクにとってラサールとの提携を受け入れられないなんらの理由でもあり得なかった。もちろんビスマルクにとって、純粋な民主主義的観点からの、また全く労働階級の理念からの普通選挙権の理論づけは、絶対に考え得られなかった。しかし彼の立脚点からこの選挙権がラサールの狙いとは全く異なって利用され得ないであろうかどうかは、徹底的に考慮に価するものであった。こうして、「ビスマルク自身は、民主主義との結びつきの前で驚いて退くことはなく、あまつさえ労働者階級の天才的な組織者ラサールと1863年交渉を絶たなかった。この交渉は、共通の敵手に対抗するものとして自由主義に立ち向かった。」(Hermann Oncken : Lassalle. S. 338 ff.).

当時プロイセン下院議員の選出は三級選挙法 (**Dreiklassensystem**) によっていた。この法は一種の金権制度で、納税総額を3等分し、最高額の納税者から数えて3分の1額に達する点までの納税者を上級選挙人、同様にして中級選挙人、下級選挙人を決め、上級、中級、下級選挙人のなかから、それぞれ議員総定数の3分の1を選出する制度であった。歴史的に観るとこの法は、「1849年5月30日欽定により発布されたもので、三月革命の所産ではなくて、逆に、三月革命によって国民が獲得した普通平等選挙権が、1848年11月のクーデターで武力的に破棄された後、専制政治によって国民に押しつけられたものであった。」(村瀬興雄「ドイツ現代史」S. 114 f.). しかし当時保守派に有利と思われていた非民主主義的なこの選挙制度は、「1835年ごろドイツ国内鉄道敷設を契機として勃発したドイツ産業革命」(本位田祥男「西洋経済史」S. 195 f.) の急激な進展と共に、1861年以来保守反動政府に対して徹底的な、また克服しがたい抵抗を行なっている下院のブルジョワ自由主義的絶対多数派たる進歩党代議士の紛うかたなき供給源となっていた。他方隣国フランスにおいて1852年以来新しいケーザル主義の覇者となったナポレオン3世は、まさしく普通選挙権を方便として利用していた。フランスではこの似非自由主義的な僭主を抑制するため自己矛盾を顧みず選挙権を制限しようと企てている共和派さえ存在していた。しかしナポレオン3世はこれまで、普通選挙権を頼りにしていることを後悔するなんらの動機も持たなかった。普通選挙権は彼に従順な議会を提供し、この議会では野党は影のうすい少数派に制限されていた。ことに農村地方はナポレオン3世に依然として忠誠であった。思うに、「ナポレオン3世の玉座は、三支柱たる軍隊・官僚および教会を土台としており、議会の提案権欠除と皇帝の専制的執行権とのために、種々の自由主義的外観

は有名無実と化していたのである。」(拙訳、クラインベルク「近代欧州文化史」、S. 191)。ビスマルクもまた農村地方で彼の支配の拠り所を求めた。彼は、1862年12月4日ベルリン駐在(1860~66)オーストリア大使 Karolyi 伯との歓談に際し、「私は場合によっては、一方ではプロイセンの権力を強化するため、他方では好都合な保守的選挙法によって、選挙に影響を与える可能性を政府にもたすため、直接的国民選挙を選ぶでしょう。」(Eyck. S. 456. Cf. Bismarck Ges. W. Bd. 7. S. 69)と語ったことがあるが、今や彼は保守的選挙を提供する選挙権を探索していた。ラサールの要求はこのために役立つかも知れないということは、ビスマルクがラサールを招いて歓談した重要な契機であった。

さらに憲法問題についてのラサールとビスマルクとの考え方の一致が、二人の会談を実現する一つの契機となった。ラサールは既に1861年11月出版の *„System der erworbenen Rechte“* によって法哲学者として一家を成していたが、彼が1862年4月以来行なっている憲法についての講演によると、彼の憲法問題に対する見解は次の如くである。「憲法問題はほんらい法の問題ではなく、力の問題である。一国の現実の憲法は、その国に存在する現実の、事実上の力関係のなかにしかない。成文の憲法が価値と持続力を持つのは、それが社会のなかにある現実の力関係の、正確な表現である場合だけである。」(Mehring. I. S. 666)。一方ビスマルクは、1862年秋ブルジョワ自由主義的進歩党によって、内閣提出の軍事予算案が猛反対を受け、それを執行すれば憲法違反であると下院が宣言した時、いみじくも次のように主張した。「憲法は結局、立法を行なう三者(内閣、下院、貴族院)が持っている予算決定の際の諸権利を規定していない。それは相互的譲歩に委ねられている。その中の一部が『空論的絶対主義』を信じてあらゆる妥協を拒絶するとなれば、その時始めて、権力を握っている部分は自らの考えに従って行動に移らなければならない。なぜなら、国家の営みは一瞬といえども停止させられるわけには行かないからである。」(Mehring. I. S. 680)。この主張は、ラサールの言葉の真実性を明示しているのであって、ビスマルクの考え方に対してはどのような異論が唱えられるとしても、彼が憲法問題を、それが現実にあるがままのものとして、すなわち現実の権力問題として捉えたことは、まさにラサールの憲法についての講演の主旨と全く一致し、従ってこの講演は、ラサールの民主主義的アジテーションそのものに敵意を感じている封建的ユンカー的階層の人々に対しても、その講演が反ブルジョワ的反自由主義的反進歩党的内容のゆえをもって大きな歓びをめざました。「憲法についてのこの講演は、民主主義と議会主義とに対立する一種の王権証明書とみなされ、ビスマルクとの会談に至る自然的な第一段階とみなされた。」(Na'aman. S. 470)。思うに、極めて現実的に冷静に権力の本質を認識していたラサールが、ビスマルクを利用しようと企てたのもまた自然の成り行きであった。この利用については、1862年9月30日下院の予算委員会においてビスマルクが、「事局の重大問題(注。ドイツ統一問題)を解決するものは、言論や多数決にあらずして実に鉄と血あるのみ」(Bismarck Ges. W. Bd. 10. S. 140)と喝破して頂点に達した憲法闘争のその後の発展が、先例的実験としての役割を演じていた。議会を解散して政府の思うままに軍事予算を編成したビスマルクの理論

と実践とは全くラサールの既述の見解と合致していた。しかも「ラサールは元来、ビスマルクを自分の弟子だと言明し、次いで、予算否決権を持たないことを自認し従って明らかに再び挿入できない礎石を憲法からもぎ取っていた貴族院をもまた自分の弟子だと言明した。」(Na'aman. S. 477)。ナアマンが次のような抽象的な叙述を用いている時、我々はラサール、ビスマルクの政策にある共通点を認めるのである。「必要とししかも嫌っている道具に頼ること、すなわちこの道具を利用ししかも悪意を抱いた敵手としてこの道具と抗争すること、——それは自由主義的な新聞および世論に対するラサールの関係となった。ラサールは後には『天職を誤った人々』(die Leute mit dem verfehlten Beruf) について、徹底的に非民主的なビスマルクと全く同じ感じ方をし、言い方をした。」(Na'aman. S. 119)。

このようにして半カ年の経過のうちに憲法問題は、ラサールが直ちに認識した通りに、権力問題であることが、歴史的にも証明されていたのである。かくて以上の2つの契機ないし理由からラサール、ビスマルクの1863年5月11日の第一回会談および6月初めの第二回会談の雰囲気醸成されていたとすることができる。

ところで第一回会談後間もなく5月23日には既述のごとく、ADAVの創立をみたのであるが、6月1日にはビスマルクの有名な「新聞条令」(Presseordnung)が發布され(同年11月廃止)、それから数日後(日付不明、遅くとも6日以前)ラサール、ビスマルクの第二回会談が行なわれている。さて、この両会談において二人は何に関して語り合ったかについては、さすがのビスマルクも15年後の社会主義者鎮圧法に利用できたかも知れない会談備忘録を残していなかったため、ラサール関係者の記録や手紙、さらに1878年のビスマルクの帝国議会演説を拠り所として、「概略だけが確証されているにすぎない。」(Eyck. S. 499)。二人は直接税と間接税との問題について語り合い、その際二人の意見は確かに全く一致しなかった。ラサールはイギリスの「反穀物法同盟の運動を引き合いに出して」(Na'aman. S. 586)、間接税を労働階級への免税点まで抑し下げることがを強調し、ビスマルクは生涯、一方では、昔から直接税に対して殊に敏感な大地主階級の紛う方なき所屬者として、また他方では、直接税が明らかに国家による経済的圧制を示しているとの強弁をもって、直接税をほとんど熱情的に論難した。しかしこの問題ではラサールの主張が明らかに公正である。「ブルジョワジーは、間接税——これは本来かれらの発明ではないが、これを前代未聞の体系に仕上げたのはかれらである。——によって、中世では大地主が享受した免税の特権を、大資本に与えた。ここでラサールは、国家財政の必要とするほとんど全額を間接税に、従って貧民に負担させながら、しかも直接税を選挙権の、従って政治的支配権の基準とし条件とする、という遣り口の、奇妙な矛盾と奇妙な公平さを強調している。直接税は、プロイセン国家の総経費1億800万ターラーのうち、わずか1200万ターラーしかまかなっていないのだ。」(Mehring. I. S. 669)。それゆえこの点でビスマルクは、ラサールよりも、さらに進歩党よりも遥かにブルジョワ的な感じ方をしたとすることができる。とにかくこの会談でラサールが間接税の除去を会談の基本としたのに対し、ビスマルクはむしろ、例の公債を有する組合を巧みな対抗手段としたのである。

しかし二人の会談の主要テーマは確かに、選挙権の変更によって議会における進歩党の圧倒的多数を打破し得るかどうかが、またいかにして打破するかということであった。「プロイセン内閣の文書が、当時内閣はこの問題にいかにも忙殺されていたかを示している。」(Eyck. S. 499). なおまた、「才気煥発の皮肉な混ぜものは、ラサールの談話をしてビスマルクに対し決してそれだけ少なく魅力的なものにすることもなく、またそれだけ少なく親しみを感じさせることもなかった。あらゆる政治的矛盾対立にも拘わらず共同の敵に対する敵意が兩人を一致させた。必要のみならず憎悪もまた珍らしい同衾者へと通ずる。」(Eyck. S. 499). かかる雰囲気の中で第二回会談後数日すなわち1863年6月8日ラサールはビスマルクあて、次のような前置きの言葉を含んだ手紙をそえて、新らしく創設された **ADAV** の規約を送り届けた。「私は閣下にあて恭んでここに、私たちの先日の会談の単に戯れの継続にすぎないものであるにしても、閣下が恐らく私を羨やむと思われる私の国家の憲法をお送りいたします！しかし閣下にとってこの細密画から明らかに次のような確信が生まれるでありましょう。すなわち、労働階級が初め正当にも、かれらの意味における独裁政治が実施されると確信する場合、本能的に独裁政治を好ましく感ずるということが、いかに真実であるか、またそれゆえ労働階級は、私が閣下に既に先日述べましたように、あらゆる共和主義的意向——またはむしろまさしく根本的に共和主義的意向——にも拘わらず、王権が王権のがわでいつか、真に革命的国民的な方向を採り、特権階級の王国から社会的革命的な国民的王国へ変化するという——もちろん極めて有りそうもない——処置をとることができると仮定したら、ブルジョワ社会の利己主義に對抗して、王権のなかに社会的独裁政治の自然的担い手を認めることをいかに好むでありましょうか！」

(Na'aman. S. 622). この手紙から推察されるように、第二回会談で、ラサールから、「労働階級は本能的に独裁政治に好意的な感じを抱いている」という意味の言葉を聞くことは、たとえば、自分のために独裁政治を利用するということについてビスマルクが確信を抱いているにちがいないという別に驚くに値しない前提条件の下であるにしても、ビスマルクを喜ばせたにちがいなかった。それは既に触れたように、ビスマルクに対しナポレオン3世の流儀を思い出させたにちがいなかった。というのは彼は確かに、この確信を労働階級に理解させ得ると信じていたからである。ビスマルクがこの会談から15年の後1878年9月17日ドイツ帝国議会で、ラサールの君主主義的傾向について長々と演説し、「ラサールはこの無敵の君主国がまさしく **Hohenzollern** 王朝に終るかそれともラサール王朝に終るかを公然と放任していたのである。」(Bismarck Ges. W. Bd. 11. S. 606) と付言したのは、彼がラサールの上述のような言い廻し方を恐らく想起したためであった。

それにも拘わらずラサールは第一回会談を失敗したものと見なし、さらに第二回会談にも余り期待を持ち得ざるに至ったと思われ、また事実失敗している。「このことは第一回会談後のラサールの手紙から推定される。というのは、全く当然のことながらビスマルクは『平和的かつ全体社会に有益な道』に留まろうと欲し、租税制度の変革は扇動と暴力とをひき起こすものだ」と恐れたからである。ビスマルクは後年すなわち既述の1878年9月17日の帝国議会で『ラサ



ールと組合のための公債について話し合った』(Bismarck Ges. W. Bd. 11. S. 608)と主張し、ほんとうらしくメモを引き合いに出した。しかし『平和的かつ有益な道』の言及だけで、ビスマルクの真意は充分推測できる。というのは、ビスマルクがこの会談を通じて企てたように、また彼が恐らく Eichler (注. 1836年生. ペンキ職人, ベルリン労働運動で活躍した。)を通じて企てたように、あらゆる一層大きな危険を伴なうことなくして労働者の同情を捉える道は、この『平和的かつ有益な道』であったからである。」(Na'aman. S. 627). この道のためだけならば所詮、ビスマルクにとっては大きな危険を冒して選挙権を改める必要は存在しなかった。ラサールの如き理想主義者も、プロイセンの現状の下ではさしあたり小規模に前進すべきを認めざるを得なかった。そのように観ると、国庫補助を伴なう組合は、ラサールにとっては、ナポレオン3世的なボナパルト主義者ビスマルクの手中にある危険な武器となり、従って信用できないものであった。要するにラサールにとっては選挙権問題と結びつかない社会的実験ほど有害なものではなかった。

それなのに、ラサールを実際におびき寄せ彼を味方に入れようとする企ては、手始めとして「実践的活動」の道に誘惑したのである。Rudolf Schramm (1813~82) は急進的民主主義者として亡命、のちに帰国して保守化した産業家、政治家であるが、彼の提案の重要性はその点にあった。シュラムは、ビスマルクまたはブーハーに激励されたためかどうかは不明であるが、ラサールを Wuppertal (ケルンの東北約50キロに在る都市) における組合工場の創設を伴なう単独実験に誘惑しようと企てた。ラサールはこの提案を全く無視したようである。「ラサールが仮りにそのような提案に応じたとすれば、彼はそのために、いわゆる『改良主義』の先駆者であるとの刻印を押されるに至ったことは明らかである。」(Na'aman. S. 627).

それゆえラサールは、これまでプロイセンにおける政治的闘争を2つの相矛盾する道において、すなわち租税制度変革の道と、組合組織に対する国家補助のための前提条件として理解される選挙権変革の道とにおいて、先頭に立って行なおうと企てたのである。ビスマルクがこの2つの道を避けたのも、既述のようなプロイセンの実情からの自然の帰結であった。ことにビスマルクは原理的には第三の道すなわちマンチェスター派的な国民主義的自由主義との同盟という第三の道をすでに知っていた。このことは殊に次の点から理解される。すなわち、1851年プロイセン使節としてドイツ連邦議会所在地たる「商業都市フランクフルトに着任した(〜1859)貧乏なユンカー(ビスマルク)は、資本主義的世界が、律義なユンカーの心臓を縮みあがらせるほどに嫌らしくはあっても、十分に魅惑的な展望を提供することを悟り、その展望に比ぶれば、東エルベの砂地での封建的な農民いじめは、けちな儲け口でしかなく、さらにロスチャイルド家と交誼を結び、」(Mehring. I. S. 650), こうしてビスマルクはユンカーとしてのみならず、すでに資本家的精神にも目覚めていたからである。従って前述した保守的な Wagener のような空想主義者とラサールとは、結果的には依然として、ただ面白いビスマルクの話し相手であるに留まった。ビスマルクが前述の1878年帝国議会演説で、„Was er hatte, war etwas, was mich als Privatmann ausserordentlich anzog.“ (Bismarck Ges. W. Bd.

11. S. 606) と公言しているのは、この意味では真実であった。

ラサールとビスマルクが第一回・第二回のいずれの会談で選挙権の変革について始めて語るに至ったかは不明である。第一回の会談においてではないらしい。というのは、既述のように、招待状によると確かに、会談の出発点は社会問題の解明であったはずである。ビスマルクはラサールとは反対に、選挙権問題を社会問題とは結びつかなかった。選挙権問題はビスマルクには、憲法闘争において進歩党打倒のための純政治的問題であった。しかるにラサールによると、「無産階級は、普通選挙権を手に入れることによって、また意識的に自主的な政治活動において権力を獲得し、もって国家を強制して生産協同組合を建設させ、かくて『賃銀の鉄則』すなわち、プロレタリアートが抱えてもって僅かにその露命をつなぐために絶対的に必要な報酬から解放される」(拙訳、クラインベルク「近代欧州文化史」S. 226 f.)ということが、窮極の目標であった。一般に、「ラサールの立場を反動にとって全く承認しがたいものとしているのは、プロイセン憲法(注。1850年発布)成立の契機はなんら正当ではなかったし、この憲法に対して行なわれる誓言は無意味だという命題であった。」(Na'aman. S. 662) こうして同床異夢の立場と狙いとがラサール、ビスマルクの第一回・第二回会談の宿命的な失敗を斉らしたものと推察される。

さらに失敗の原因について一步を進め、本稿の初めの辺りで挙げた „Archiv für Sozialgeschichte Bd. II“ (1962) のなかのナアマンの論文 „Lassalles Beziehungen zu Bismarck-ihr Sinn und Zweck“ に言及したい。この論文は、一般にラサール、ビスマルク会談失敗の原因について次のように論断しているが、筆者はラサールに対しやや苛酷なこの論断をもって、筆者の論旨への補足とする。「会談が実を結ばなかったのは、ビスマルクがラサールのユートピア的な提議に従わなかったということには存しない。思うに、間接税の廃止によっても三級選挙権の廃止によってもプロイセンが革命化することではなく、(ラサールのいわゆる) 社会的独裁 (soziale Diktatur) によって自由主義的官僚政治 (liberale Bürokratie) が排除されるわけでもなかった。実を結ばなかったのは、ラサールが近代的社会的な大衆党 (Massenpartei) の政治的影響力を理解せず、ドイツの統一に消極的にも積極的にも考慮を払わなかったということに存している。、、、ラサールにとって会談が実を結ばなかったのは、彼がビスマルクとの関係からいかなる種類の獲物をも手に入れなかったという面 (Ebene) にも存しているのではなくて、ビスマルクとの交渉のおかげで増大していた組織のチャンスを積極的に利用できなかった(注。ドイツ殊にプロイセンの労働運動を左右する拠点ベルリンの労働者を味方として組織化できなかったことを指す。) という点に存している。」

(昭和49年9月30日受理)